

## 我が「サローマの休日」

水樹涼子

8月上旬の佐呂間町とサロマ湖畔の旅は、私にとって本当に思い出に残る意義深いものとなりました。

まず同行の家族と一緒に「栃木地区」へ行けたこと、そして栃木神社へお参りできたことは、栃木県民である私たちにとって、何か最小限の役目が果たせた様な気分になって、少し気が楽になったのも事実です。栃木県小山市出身の版画家・小口一郎の版画展を佐呂間町で見られたのも、また改めて深い因縁を感じました。

以下、二日間の旅の様子を軽一いエッセイ風に記します。

\* \* \*

旅の間の天気予報は、ずばり雨。しかも所により豪雨という。「雨とは本来自然の恵み」と心がけていたせいか、覚悟に反して薄曇りのまま天気は保って、気温も湿度も紫外線量(?)も旅にはちょうど良い気候。

湖畔のホテルで朝食を済ませると、すぐにサロマ湖展望台へ。海拔〇〇メートル、高度はそれほどないはずなのに、まるで高い山の頂からはるか眼下の雲海を見ているような絶景が展開している。ハッと息を呑む。あぁ、濃い朝霧があたかも雲の層の様に見えたのだ。その下には、サロマ湖が垣間見える。

目の覚める様な『サロマンブルー』とやらも一度はこの目で見てみたが、グレーがかった群青のこの渋い色合いも捨てたものではない。むしろ、人生の年輪を経てきた者には、却ってリアルに共感できる色といえるのかも……。しばし妙な思いにふける。

雨傘にもなりそうな大きなフキの葉に驚きながらも、(この日は付近の草刈りをしている方々がおられました。感謝です)展望台から降りて、キムアネップ岬へ。薄曇りの中、少し湿った浜風を肌で感じながら、遊歩道をゆっくりと散策。淡い黄色のカラマツ草、薄紅色が可憐なエゾフウロ……、と植物に詳しい自分の娘に花の名前を教えてもらいながら、潮風に吹かれて歩いているのは、極上の時間だ。海無し県の栃木育ちゆえの感想だろうか。いいえ、決してそうではないはず。

次に向かったワッカ原生花園では、『竜宮街道』を馬車に乗って、のんびりと観光。パカパカとのどかな蹄の音をたてて幌を牽いてくれる一頭のばん馬に一抹の申し訳なさを感じる。なぜならわれわれ家族三人だけで二百キロを越える体重。おそろおそろ御者役のおじさんにお馬さんの名前と体重を尋ねると、牝馬でその名は『新姫』、体重は「1トンを超えるよ」とのお返事。何だか少しほっとして、そのまま馬車に揺られながら果てしなく広がる草原の風景を心ゆくまで楽しむ。

おじさんの解説によれば、ここは文字どおりの「原生花園」で、人間の手で植えたものは風よけの松林だけ、他はまったく手つかずの自生の植物ばかりという。なのになんという贅沢な光景が目前にあるのだろう。ゆらゆらと揺られながら、野の植物たちと想いの限り『逢瀬』を重ねる。ハマナシはもちろん、ハマエンドウ、カワラナデシコ、紅い野いちご、ツリガネニンジン……。名前をあげればキリがないほどだ。

北冷のオホーツクを目前にして遅しく生きる植物たちは、春と夏と秋とをまるで一時に味わうかのようにして咲き競う。いや、決して競っているわけではない。ただ、あり

のままの生命を精一杯、全うしようとする。そのけなげさに何とも心癒やされる。

手間暇をかけた植物園や都会のテーマパークの装飾的な花たちとは違う、唯ひたすらに清楚でひっそりと咲く北の国の草花たち。こんな野生の花に心惹かれるある種の間人にとっては、この出会いほど心ときめくものはない。

——ああ、これって、まさに、サロマン・ロマン……。などと「サローマの休日」さながらの言葉遊びを楽しみつつ、サロマ湖とオホーツク海という二つのうみ風に吹かれながら、自分自身との対話ができるのは、至福以外のなにものでもない。

最後に、帰り際に立ち寄った、「道の駅サロマ湖」でのアクシデントというか、エピソードを一つ。

建物内の物産店でのことだ。海産物の珍味やらハッカ飴やらカボチャの菓子やらとお土産品を買い集め、いざレジ前へと並んだ。自分が買ったお土産代を夫に全額払わせようとしたちゃっかり根性が招いたことだったのか……。 (いや、ちがうと思いたい。)

私が入会したばかりのサポーターカードを得意げにレジの人に見せて、さっそく5パーセント割り引きにしてもらい、夫に代金を支払ってもらって建物の外に出た。テントの下でいい香りの立ちこめるホタテの浜焼きを3人分注文して焼けるのを待っていると、「〇〇さんは、いませんか」と、突然夫の名前を呼ぶ人がいる。

えっ？と、一瞬、耳を疑った。ここでは私でさえ顔も名前も知られていないはずなのに、なぜ、どうして夫の名前を知っている人がいるの、と頭の中は混乱する。よくよく、その人を見ると、何と夫の免許証を片手にかざしているではないか。「はい、ここにあります」慌てて手をあげ夫を差し示すと、「〇〇さんで間違いありません」と、相手の方もほっとした表情。「さっき、店の中で会計したときに落とされたようですよ。ああ、良かった。まだここにいてくれて。もう、車が出てしまったらどうしようかと思いましたよ」と、説明してくれる方の胸の所には、きちんとしてご本人の名札が付いていた。

私は、ほっとしたのと恥ずかしいのと夫をどやしつけた気持ちとを必死に抑えて、その人に言った。「本当にありがとうございます。貴方のお名前は、しっかり覚えて帰ります」と。言うまでもなくこの物騒なご時世、免許証を失くした上にもし知らない人に拾われて悪用でもされてしまったら、どんなに悲惨な目に遭うか、容易に想像がつくからだ。そしてつくづくこう思った。——佐呂間町って、なんて幸運な所なんだろう。そして、何よりホタテの浜焼きの香ばしい匂いが、悲惨な運命から私たち家族をすくってくれたのには、まちがいないと。

それから焼けたての大きなホタテ貝を親子でほおばり、無事、帰途についたのでした。

(注) 竜宮街道……サロマ湖とオホーツク海を隔てる細長い砂州を縦断できる野道。

高知市生まれの詩人で文筆家の大町桂月が付けた名前だそうです。

ハマナシ……バラ科の素朴な一重咲きの花。実の形が梨に似ているので、この名が付いたが、ハマナスと呼ばれたりすることが多いという。(娘からの受け売り)

サローマの休日……若きオードリー・ヘップバーン演じる王女と新聞記者との一夏の淡い恋を描いた名作映画のタイトルは「ローマの休日」。それをもじったサロマのネーミングというかキャッチ・コピーですよ。多分、いいえ、きっと！



■水樹涼子（みずき りょうこ） 作家

栃木県鹿沼市出身、下野市在住。東京女子大学文理学部日本文学科卒業、日本ペンクラブ会員。

小説『花巡り』にて栃木県芸術祭文芸賞受賞、同県文化奨励賞を受賞。栃木県「とちぎ未来大使」他、歴任。現在、NHK文化センター創作講座講師、獨協医科大学非常勤講師等、文章創作指導にも力を入れている。

■主な著作

『岸边に生う 人間・田中正造の生と死』『思川恋歌』『聖なる衝動 小説 日光開山勝道上人』『月王伝説』『とちぎ綾織り下野の歴史と伝説を訪ねて』『雪王の元へ』音楽劇台本『古代史ファンタジー 虹のかけ橋』（2005年上演）演劇台本『天地と共に～田中正造を生きる』（2013年上演）作詞を手がけた校歌、合唱曲等多数。